慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	チャーチズムにおける労働者の性格とその思想
Sub Title	The characters and thoughts of workers in the Chartist movement
Author	野地, 洋行
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1959
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.52, No.1 (1959. 1) ,p.60(60)- 80(80)
JaLC DOI	10.14991/001.19590101-0060
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19590101-0060

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

チャーチズムにおける労働者の性格とその思想

野地洋行

一、研究の課題
二、ロンドン・アーチザンとその思想的役割
三、農村手工業者とコベット
四、オブライエン――チャーチズムの思想
五、工場労働者
六、結び

一、研究の課題

産業革命が単なる技術的変革であるばかりでなく、必然的に社会的変動をもたらすものであったことはいうまでもないが、一八三〇年代と四〇年代のイギリスは、このような産業革命によってもたらされた社会的変動が政治の表面において集中的に自己を表現した時代である、ということができよう。

それは議会改革の時代であると同時に、又チャーチズムの時代であった。すなわち、封建体制の中からそれを掘り崩しながら成長した産業資本は、一八三二年の議会改革によって経済的には既に現実のものであったその支配権を、政治的支配権に迄拡充したのであるが、それをもたらした正に同じ過程は、同時に資本主義的発展の対立物、即ち、労働運動の成長をもたらしたのであった。だから一八三〇年代の末から一八四八年にかけての、チャーチズムとして知られる広汎な議会民主々義運動は、単に大衆的な政治運動であるという以上に、生成期の労働運動としての性格を極めて多分に含んでいるのである。それは、中産階級が政治的支配権を、土地貴族と大商業資本との独占から奪い取ったと正に同じ手段によって、労働階級のために、窮乏からの脱出の道を用意しようとしたのである。

だが〝真に大衆的な政治的に形をなしたプロレタリア的革命運動〟[1]としてのチャーチズムは、それが、中産階級的要素をも含んでいるということを別にしても、それを構成する労働者が、いまだなお近代的プロレタリアートとしての階級的同質性に到達していなかったそのために、生成期の労働運動がさけることのできない複雑性と不統一性をもつこととなった。

十九世紀前半の労働運動は、近代労働運動が持っているような、労働組合、労働者政党、及び社会主義の、強固な統一性の上に立つことはできず、むしろ、このような統一性に到達するための、苦難に充ちた、摸索の過程であった、といえよう。われわれは、労働者の諸階層の不満が、ある時は暴力的な機械破壊となり、ある時はオウエン主義の空想的実験となり、或いは、サンジカリズム的闘争となって現われるのをみるのである。

チャーチズムにおいても、産業革命によってもたらされた社会的変動の波の中で、圧倒的な資本の要求に従ってあるいは成長し、あるいは死滅の淵に追いやられてゆく労働者諸階層は、その経済的窮迫の解決の手段を、集中的に議会民主々義に求めたのである。だが、政治的民主々義の要求という点では一致していたこれら諸階層は、それぞれが背負っている歴史的性格の多様性のゆえに、運動自体に極めて複雑な性格と局面とを与えることとなったのである。チャーチズムの性格の複雑さ、その規定の困難さは、それを担っている社会的諸階層の複雑さ、その性格の多様性に由来するものと考えられる。この点についてドッブは次の様に述べている。「家内制工業やマニュファクトリーの形態が十九世紀の後半まで残存したことは、労働生活や産業労働者にたいして、ある重要な影響を与えたが、その影響の意義はほとんどまったく認識されていない。この意味は十九世紀の第四・四半期にいたってはじめて、労働者階級が工場プロレタリアートという同質的な性格をもちはじめたということである。[2]」

かくて、われわれにとって重要なことは、チャーチズムの複雑な具体的経過を叙述するだけでなく、それを構成する諸階層の性格を解明することによってチャーチズムの複雑性をときほぐすことなのである。そうすることによって初めてチャーチズムを理論的に再構成し、労働運動史上におけるその位置を規定する事が可能になる、と考える。

モートン及びテイトは、チャーチズムを構成する主要な社会的階層として次の四つをあげている。

一、中産階級
二、ロンドン・アーチザン
三、農村手工業者
四、工場労働者

「この様な分析はしばしば〝精神力派〟(moral force)〝チャーチスト〟と〝実力派〟(physical force)チャーチストとして描かれる伝統的な、しかし誤りやすい区別よりも、その中に発展した力や弱点や闘争の理由等について、より明確な観念を与えるであろう。[3]」

「これらすべてから、チャーチズムが単純な運動ではなく、極めて複雑な運動であることが判るであろう。運動を可能ならしめたその統一は、多くの特殊事情の結果であったし、その統一を達成した要素が多様であったことは、深刻な内部抗争と混乱を招いた。一八四

〇年代の末に急速な衰退に導き、表面的には一八三九年や一八四二年の敗北より致命的でもなかった敗北から、一八四八年以後再び甦ることを不可能ならしめたものは、かかる統一を可能ならしめた諸条件が消滅してしまった、ということである。[4]」

歴史記述としての、伝記としてのチャーチズムは、可成りの研究を集積しているが、その複雑さを分析し、労働運動史上におけるその位置を確定しようという理論的努力はこれまで余り見られなかったと思われる。かくして私の研究もこの様な努力の一環として、チャーチズムを構成する労働者諸階層の性格を明らかにすることによって、チャーチズムの労働運動史上における位置づけを試みたいと思う。従って、チャーチスト運動の具体的、記録的叙述はさし当って私の課題ではない。又、チャーチズムの構成要素の一つとして上に述べた通り中産階級――一八三〇年代にはアトウッド（T. Attwood）のバーミンガム政治同盟として現われ、一八四〇年代には穀物法反対運動として現われる――があるが、紙面の都合上この稿では除外せざるをえなかった。最初に以上のことを断っておきたい。

注（1）　レーニン「第三インタナショナルとその歴史上の地位」（「マルクス＝エンゲルス＝マルクス主義」国民文庫第三分冊所収）一〇六頁。

（2）　M. Dobb; Studies in the Development of Capitalism, 1951, p. 265. 邦訳下巻　六九頁。

（3）　A. L. Morton and G. Tate; The British Labour Movement, 1956, p. 80.

（4）　Ibid., p.83.

二、ロンドン・アーチザンとその思想的役割

ロンドン・アーチザンの独自性を認めることは決して独創的なことではない。しかし、チャーチスト運動の中でそれが果した役割を正確に評価するためには、その歴史的な性格をより明確に把握することが必要である。一言にしていえば、彼らの果した役割は、中産階級の急進主義を、北部の労働者大衆に伝える為の媒体となった、ということである。

産業革命の過程で、工業生産の中心は都市ギルドから、北部の農村地方へと移行したけれども、[1] ロンドンにおいては古い形態の産業が、資本主義生産の影響をうけながらも、依然としてギルド的伝統の中で独自な生存を続けていた。[2] そのような伝統の中にある労働者層は、それ以外の、地方農村における手工業者や、新しい工場労働者などとは極めてその性格を異にしていた。[3]

このようなギルド的伝統の中にあるアーチザンの組織をウェッブは次のように性格づけて、「この時代の都市工匠の典型的な〝職業クラブ〟（trade club）は、資本家的雇主の小階級からよりも、むしろ多数の筋肉労働者からはっきり区別された、非常に熟練した職人の孤立的な〝徒党〟であった。」「彼らがその雇主との時折の紛争は、別個の社会的階級の間の衝突、というよりもむしろ内輪喧嘩に似ていた。[4]」とのべ、彼等の組織と、近代的工場労働者の労働組合との性格の相違を明らかにしている。だが、ここで大切なことは、このようなロンドン・アーチザンの職業クラブの伝統の中から高度の政治性が生れた、ということである。というのは、彼らがその生活や地位の防衛のために用いた伝統的手段は、勿論機械破壊でもなく、闘争的団結に基いたストライキでもなく、古くはレベラーズの手段でもあり、後にはチャーチストの手段ともなった議会への〝請願〟であり、立法的措置への訴えであった。十九世紀に入っても、彼らはそのギルド的特権をかつては保護奨励していたエリザベス王朝の徒弟法の条令、即ち、徒弟制度の厳格な実施と、賃金の治安判事による裁定、を強制するよう政府に訴えた。このような訴えは、旧いギルド的体制の中にますます資本主義的生産関係が入り込み、それを掘り崩してゆくことへのプロテストであって、請願によって政府を動かそうという運動は、決して〝労働者〟一般が偶然思い出し、或いは思いついた方法ではなく、この様なギルド的伝統をもった都市職人の中に〝生きた〟ものなのであった。ここに彼らが、高度の政治意識を持ちながら、あるいはそれだからこそ、その方法において平和的であり、微温的であり、議会主義であった理由の一端がある。彼ら自身の特殊な地位と伝統が、彼らをしてその最も使い慣れた闘争手段である立法的な訴え、を選ばせた。一八〇〇年の団結禁止法も、この様な中世的保護立法を求めるロンドン職人層の組織に向けられたものではなかった。政府が怖れたのは、「北部及び中部諸州の鉱夫と工場労働者の間における労働組合組織の発生[5]」であった。ロンドン・アーチザンの政治的団結に対しては、団結禁止法は意外な寛容を示している。[6]

だが、十八世紀から十九世紀にかけての急速な資本主義の発展につれて、彼らの小商品生産者としての地位そのものが没落し始め、それにつれて彼らの一般筋肉労働者層への親近性と、資本家的中産階級との異質性は主観的にも客観的にも明らかになってくる。このことによって、都市職人のグループは、彼らが中産身分として本来もっていた政治性[7]を更に新しい労働者階層に伝えた、といえよう。かくて彼らは、政治的民主々義の思想を、資本家的中産階級から新しい労働者階級へ伝えるための媒介となりえたのである。このことは、ロンドン通信協会から、ロンドン労働者協会、更にはチャーチストという一連の彼らの運動の経過をみれば明らかである。それは、エンゲルスが名づけたように、工場労働者の団結が〝闘争の学校〟であるのに対して、正しく〝政治の学校〟とよびうるであろう。

この様なロンドン職人の役割は、具体的な政治行動だけでなく、思想の面でのその役割と対応している。というのは、彼らは産業資本解放の為の理論たるベンタム主義を、可能な限り労働者的方向、より正確にいえば、職人的方向へと発展させたのである。だが、この事は勿論、ベンタム主義が発展して社会主義になったとか、マルク

ス主義は功利主義の発展形態である、などということを意味するものではない。ミルは社会主義者ではなかったし、オウエンの空想的社会主義も、タムスンらの全労働収益権説も猶、マルクスの剰余価値学説にもとづいた社会主義に対して一つの断層[8]をもっている。しかしながら、小商品生産者が新しい労働者階級の中に消滅したように、全労働収益権説も剰余価値説の中へ解消したとしても、なおそれへの歴史的前提をなすものであったことは疑えない。このように、中産階級的急進主義を労働者の立場からとり上げ、功利主義に労働者的内容をもりこみ、その革新性を可能な限りおし進め、チャーチズムの出発を用意したことこそ、ロンドン・アーチザンの役割だったとすれば、その最初の代表者としてフランシス・プレース(F. Place)があげられる。

ベンタムが、人間の自然的権利とか、社会契約などという近代自然法の思想を嘲笑し、それを功利という苦痛・快楽の機械的計算をもっておきかえた[9]、ということからは、労働者大衆の福祉が無視されてもよい、という結論は直接、論理的には出てこない。それを専らブルジョア的ならしめるものは、それが階級的利害を、功利という抽象的計算の中に解消させてしまったその論理構造そのものの中にあるのであるが、さし当って、功利主義を中産階級のものとして限定した最大の要因は、そのマルサス人口論、及びリカードオ賃金論との結びつきであった[10]。それによってベンタム主義は、一方において旧支配階級には急進主義として対立すると同時に、他方では労働者大衆に対立するものとなることができたのである。つまり、それによってベンタム主義は、自らを人類の解放理論ではなく、産業ブルジョアジーの解放理論として限定することができたのである。これについてヤング及びアシュトンは次の様に述べている。「経済学者達は細心にその所説に多くの制限を課したけれども、マルサスとリカードオの学説は、労働階級には絶望を、中産階級には自己満足をはぐくんだ[11]。」マルサスの変哲もない人口論が、かくも高い社会的評価をえたのは、それが労働大衆の貧困に科学的口実を用意したからであり、フランス革命をイギリス議会改革に迄緩和するのに役立ったからに他ならない。従って労働者階級を擁護しようとする人々は、すべてマルサス人口論と、リカードオ賃金論との対決から出発しなければならなかったのである。

まず、フランシス・プレースについてみよう。彼はベンタムの全面的な信奉者であると同時にマルサス人口論の支持者であった[12]。この点に関しては彼はブルジョア急進主義者と何ら異なる所がない。只、マルサス、リカードオの学説によって労働大衆の貧困を正当化することに満足しなかったその態度が、彼をブルジョア急進主義者達から区別する。だが、この様にマルサスの理論をうけ入れたことの中に彼の活動の限界が明らかになってくる。マルサス理論を前提として労働者の運動を指導するとすれば、プレースには只一つの道しか残されていない。すなわち、マルサスが人口増加を抑制するための手段として考えた、労働者の道徳的向上だけなのである。ウォラスは次の様にいっている。「彼は、教育や、民主々義や、団結の自由や、その他知識と自尊心を一般に広めるようなものすべてのために働くことができた。というのは、彼には、知識と自尊心とはそれ自体よいものであるばかりでなく、人口の制限に導くように思われたからである[13]。」プレースの活動は、リカードオやマルサスの救いのない、いわゆる〝ディスマル・サイエンス〟(dismal science)の肯定を前提とした、一種ペシミスティックで消極的な性格をもっていたのである。これが、ブルジョア急進主義が労働者的方向、より正確には職人的方向へ発展して行った最初の段階である。だが、この様なペシミズムは後にみるようにオウエンや、ホジスキンの思想によって生気を与えられ、ラヴェット(W. Lovett)におけるように遙かに積極的、楽観的で前途に明るい希望をもつことのできる思想へと成長してゆく。ウォラスは、プレースとラヴェットの文通をとり上げ、二人を比較して次の様に述べている。「プレースの快活さが、忍耐強い絶望の調子で終っている様に、ラヴェットの自分の憂鬱に対する弁解的な返事は実際楽観主義を主張している。ラヴェットはその当時、プレースがそのマルサス的経済学の故に見出すことができなかった社会主義、すべての苦痛、すべての悪に対する一般的対策たる社会主義に到達していた[14]。」では、その様な発展はいかなる道を通って可能となったのであるか。

プレースのペシミズムの原因となったマルサス人口論を打破し、ベンタム主義の伝統の中で[15]、労働者の前途に明るい可能性を打ち開いた最初の人はオウエンである。ニュー・ラナークの大工場主として、巨大な生産力の解放を目の辺りにみていたばかりか、自らそれに参与したオウエンは、その無限の可能性を知りつくしていたために、労働者の貧困は不当である、ということができた。「世界の人口はその維持の為に生産される食糧の数量に常に適応しつつある、というマルサス氏の主張は正しい。しかし彼は聡明で勤勉な国民は、無知で悪政のもとにある国民が生産するところよりも、いかに多くのものを同じ土地から生み出すものであるかをわれわれに語らなかった。だがそれは無限大対一の関係にあるのである[16]。」この様な楽観的確信が、巨大な生産力の現実的な確認に裏付けられていることはいう迄もないであろう。人間が現在不幸なのは、彼らが余りに僅かしか生産しえないからではなく、何かが誤って、或いは悪しく指導されているからだ。このように、オウエンはブルジョアジーの目からではあったが明らかに新しい生産力を確認し、それを労働者の為に解放しようとしていた。かくしてマルサスは、論理の上でなくとも、事実の認識の上で克服されたのである。マルサスによって閉されていた労働運動の理論化の道が、ここに大きく開かれる。

だがオウエン主義が、信奉者グループの個人的信条に止まり、一つの社会主義的学派にすぎない限り、それは現実の労働運動に広汎な影響を与えることはできなかった。実際オウエンが訴えたのは労働者にではなく、政府の有識者に対してであり、資本家の博愛と慈善心に対してであったのである。それゆえにこそオウエンにあって

は、闘争的な政治運動は上層階級の理解と、階級的協力を妨げるものとして排除されていたのである。

だが、彼と、その信奉者のアメリカでの共産主義的実験が失敗に終ったその頃、オウエン主義は急速に現実的な力となって労働者階級に浸透していた。この浸透の過程は、オウエン主義が政治的急進主義運動と結びついて行く過程であると同時に、オウエン主義そのものの変容の過程であった。その様な変容はオウエン主義をうけとる労働者諸階層によって異なっているのであり、ここではそれを概括するに止めるが、まず、第一に、ロンドン、アーチザン層にうけ入れられた場合、それは小生産者の生産者協同組合となり、第二に農村地方の半農民的手工業労働者にうけ入れられる場合には、農業協同体的な土地社会主義となり[17]、第三に、近代的な工場労働者にうけとられる時、オウエン主義は消費者協同組合の思想的源泉となるのである[18]。オウエンと〝オウエン主義者〟との袂別、ベアのいう〝正統派オウエン主義と改革主義的オウエン主義の分離〟[19]は正にこの様な過程を意味する。

さし当ってここでの主題は、オウエン主義がロンドン・アーチザン層に受け入れられた場合である。この過程を思想的に担ったのは、ウィリアム・トムスン（W. Thompson）であった。

トムスンはオウエン主義を小生産者的に解釈することによって、それをペンタム的急進主義と結びつけることができた。これは一つの妥協であって、本質的にブルジョア思想であるベンタム主義は、ロンドン高級職人の線までは〝労働者的〟になることができたのであり、又オウエン主義は小生産者的に限定されてはじめて政治的急進主義と結びつくことができたのである。

ではトムスンがオウエンの思想を小生産者的に解釈したということはどういうことであろうか。すでに述べたように、近代的大工場主であるオウエンは、近代的機械制生産の生産力を労働者のために、大規模に解放しようと考えたのであって、矮小な生産力に基いた小生産者の天国には興味がなかった。だから彼にとっては、ロンドンのアーチザンらが試みた、ギルド的な小生産者の生産者協同組合や労働交換所は、協同社会を実現する為のほんの副次的な手段にすぎないのである。エンゲルスは、労働銀行を凡ゆる社会悪の万能薬と考えたブルードンに較べて、この点にオウエンの優越性を認めている[20]。所が、トムスンにとっては、協同組合のみが「各人は労働の提供者であると同時に資本の所有者でもある[21]」ような理想的生産社会に到達するための唯一最善の手段なのである。トムスンも又新しい機械による生産力の巨大な発展は知っていた。しかし、それがオウエンの「長所ともなり欠点ともなった実際家的経験主義」に裏付けられず、抽象的に理解されていたために、オウエンが考えもしなかった機械と家内工業の結合を提案する。「協同組合のみが、このように家内工業制度の長所と、機械工業制度の長所を綜合しうるのである[22]。」だが、生産者協同組合を組織して、しかも機械を家内工業制度と結びつける、などということが、近代的資本家にとっても、又彼に従属する近代的工場労働者にとっても余り現実性をもたない事であり、それが専らギルド的な憧憬に根ざす小生産者の天国でしかなかったのはいう迄もない[23]。実際トムスンに従ったのは、ロンドンの職人達であった。

だが、一方このことによってトムスンは、オウエン主義を政治的闘争に、即ち、急進主義に結びつけることができた。オウエンは、最大幸福の原理を労働者に迄普延し、労働者の幸福こそ最大幸福を実現するものであることを確認したけれども、それと同時に労働と資本の対立をも、この最大幸福という抽象的計算の中に解消してしまい、かかる最大幸福を実現するために資本家と労働者の階級的「協同」（Co-operation）を主張することとなった。オウエンが闘争的な政治運動を憎んでさえいたのは労働者の幸福を実現する為には資本家の友情と協同が必要だったからである。だが、協同組合の量的発展のみが、理想的な生産制度を実現する唯一つの手段と考えたトムスンにとっては、この様な階級的コオペレイションは全く必要がない。そこでオウエンがきびしく排斥した政治的運動がトムスンによって取り上げられた[24]。かくしてトムスンは、オウエン主義をロンドン・アーチザンの生産者協同組合として限定し、そうすることによってオウエン主義に政治的急進主義を結びつけたのである。

この様に、オウエンが労働者に未来の社会への希望を与え、トムスンがそれを急進主義に結びつけたとしても、それは現実の社会組織、或いは経済組織と戦う闘争の論理をもっていない。現実の社会組織とは、産業資本が支配する社会組織であり、この資本の支配に対抗して労働の権利を主張する論理なくしては、社会主義は依然として現実の彼方の、空想的なものでしかなく、労働者急進主義は中産階級的急進主義に対して自らを論理的に区別することができない。この論理を提供したのがトマス・ホジスキン（T. Hodgskin）の労働擁護論である。ホジスキンの理論は、資本主義的生産のメカニズムの中から労働者の貧困の原因をえぐり出すものではなく、のちにマルクスの剰余価値論によって克服されねばならなかったが、ともかく、ロック、スミスの近代自然法に基いて労働全取権を主張し、資本家の詐取と盗奪からこの権利をとり返えすために労働者の団結を説いた。資本主義的生産過程を労働過程に還元してしまい、凡ゆる労働の成果を労働者の権利として要求するこのホジスキンの理論は、ロンドン・アーチザンを中心とする小生産者にこそ最もよく理解され、かつ受け入れられたであろう[25]。かくして資本自体に対抗する強力な論理は、ロンドンの職人層を媒介として労働階級全体に拡がる。ホッベルは「ホジスキンが現存体制の攻撃の武器を提供したとすれば、新しい制度の理想を準備したのはオウエンである[26]」とのべているが、このようにして労働者的急進主義は中産階級的急進主義から自らを明確に分離することができたのである。

このような過程の頂点に立つのがウィリアム・ラヴェットである。彼はブレースのいう通り「半分オウエン主義者であり、半分ホジスキン主義者であった[27]。」けれども、更に又ブレース自身の弟子でも

あった。かくしてラヴェットと、彼によって起草された人民憲章の基本的思想は、オウエンの社会主義と、ホジスキンの労働全収説と、ベンタム的急進主義の三つの系譜から成っているのをみる。[28]

以上によって我々は、プレースの絶望的なペシミズムが如何にしてラヴェットの精力的なチャーチズム活動に発展しうるか、その論理を追ってきた。このような発展は、ロンドン・アーチザンの組織の具体的発展に反映されている。最初オウエン主義の協同組合団体として出発した職人達は、一八三二年の議会改革と、一八三四年の（オウエンの全国労働組合大連合の結末としての）ドゥチェスター事件[29]を契機としてオウエン主義の空想性に気づく。この二つの事件を通して政府立法の階級性を身に沁みて味わった彼らは、急速に政治性を発展させ、やがてチャーチズムとして知られる大衆的な議会民主々義運動の出発を用意するのである。かくして、ロンドン・アーチザンは、中産階級の急進主義から労働階級の急進主義を発展させる媒介者となったのである。

注（1）「都市の排他政策の打破と手工業ギルドの独占の没落とが、マニュファクチュアの形態であれ家内工業の形態であれ、資本主義的生産の発展の一つの条件」であった。M. Dobb; ibid., p. 161. 訳、上巻二三四頁。

（2）T. S. Ashton; The Industrial Revolution, 1760～1830, 1949, p. 49. 中川訳、五三頁。

（3）A. E. Dobbs; Education and Social Movement, 1700～1850, pp. 235～6.

（4）S. and B. Webb; The History of Trade Unionism, 1920, pp. 45～6. 荒畑訳、上巻六一頁。

（5）G.D.H. Cole; A Short History of the British Working Class Movement, vol. I, 1789～1848, 1925, p.56. 林、他訳六一頁。

（6）プレースが団結禁止法廃止運動に活躍することができたのは、彼がこの様な職人のクラブしか知らず、北部の工業労働者の闘争的団結をみたことがなかったからだといわれる。実際彼は後に〝労働組合有害論〟職業クラブ正当論〟なるパンフレットをかいている。G. Wallas; The Life of Francis Place, 1771～1854, 1918, p. 356.

（7）「社会的にいえば、労働階級の最高給層は、大さっぱに〝下層中産階級〟と呼ばれるものから発生した。実際〝下層中産階級〟なる言葉は、時に労働貴族を含む事が多い。」E. J. Hobsbawn; The Labour Aristocracy in 19th Century Britain, Essays in honour of Dona Torr, Democracy and the Labour Movement, 1954, p. 202.

（8）出口勇蔵篇「経済学史」二七〇～一頁参照。

（9）河合栄治郎「英国社会主義史研究」第一部六三～七七頁参照。

（10）この様な結びつきが、当時のブルジョア思想の典型であった。J. L. and B. Hammond; The Town Labourer 1760～1832, 1949, p. 38.

（11）A. F. Young and E. T. Ashton; British Social Work in the nineteenth Century, 1956, pp. 18～19.

（12）G. Wallas; ibid., p. 166.

（13）Ibid., p. 171.

（14）Ibid., pp. 362～3.

（15）「ベンタムの定式が、オウエンの前提であった」M. Beer; A History of British Socialism, reprinted in two volumes, 1953, vol. I, p. 163. 加田訳　一九五頁。

（16）R. Owen; A New View of Society, Four Essays on the Formation of Human Character, 1813～16, p.73. 楊井訳　一三九頁。

（17）「彼にとっては工業社会または農業社会という特殊な社会発展段階がその共産社会の全き姿であるというよりも、自給自足的な生産と消費が結合する社会が目的なのである」。平実「協同思想の形成」一九九頁。

（18）オウエン主義からの生産者協同組合と消費者協同組合の分離は G.D.H, Cole; ibid., vol. II, pp. 33-40. 訳、第二分冊三〇～四二頁参照。

（19）J. F. Bray; Die Leiden der Arbeiterklasse und ihr Heilmittel, eingeleitet und übersetzt von M. Beer 1920, SS. 19～20.

（20）「この制度（協同組合と労働銀行）は……いっさいの社会的害悪の万能薬であると主張するものではなく、さらにずっと徹底的な社会改造へのほんの第一歩をあらわすにすぎない」F. Engels; Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft, Dietzverlag, 1953, S. 50. 邦訳（大月版）六八頁。

（21）R. K. T. Pankhurst; William Thompson, British Pioneer Socialist, feminist, and Co-operator, 1954, p. 129.

（22）Ibid., p. 104.

（23）この様にオウエンとトムスンの相違を強調する私の見解は、平実氏の見解と全く対立的である。平氏は「オウエンの思想は労働者のギルド制度への憧れを利用」したのであり「トムスンの思想も又オウエン主義を丸呑みに」したものである、と主張しておられる。（前掲書二六一頁）私の見解を支持するものとしては、前記エンゲルスの叙述があり（注20参照）、更にベンタムーストはオウエンとトムスンの対立を資料的にではあるが強調している。例えばオウエンは次の様に言っている。「トムスンが示唆した様な小協同社会の建設は運動の関知する所ではない。大規模に事を打建てる方が〝ずっと容易〟であ

る」(Pankhurst; ibid., p. 172)。従って「ギルド制度への憧れ」云々なる言葉は専らトムスンに限定さるべきであろう。

(24) パンクハーストは特にこの点を強調している。Pankhurst; ibid., pp. 172, 205.

(25) ホジスキンについては白井厚、野地洋行「トマス・ホジスキンの『労働擁護論』」三田学会雑誌、第五十一巻第九号参照。

(26) M. Hovell; The Chartist Movement, 1950, p. 50.

(27) Ibid., p. 56.

(28) 上田貞次郎も又略々同様のことを認めている。上田貞次郎「産業革命史」一五一頁。

(29) 五島茂「イギリス産業革命社会史研究」三〇〇～一頁。

三、農村手工業者とコベット

チャーチスト運動の大衆的基盤の一つは、北部の新救貧法反対運動であった。既に示した通りチャーチズムの思想的故郷はロンドン・アーチザンであったけれども、運動が北部の大衆に拡がり始めると、その主導権は逆に北部の大衆にのみ込まれてしまった。では何故に、新救貧法反対運動がチャーチズムにかくも深刻に関与してくるのか、そして新救貧法反対運動を推進したのはいかなる労働者階層であったか、考察してみよう。私はこれを主として農村手工業者を主体とするものであると考える。

チャーチズムの研究において農村手工業者は手工業者という面でしばしばギルド的アーチザンと混同され、「北部工業地帯の労働者」として概括される場合には逆に工場労働者と混同される。だが、彼らは、ロンドン・アーチザンと近代的工業労働者の間に独自の地位を保っている。

都市とギルドの独占の外に、それに対するアンティテーゼとして発展した農村家内工業の手工業者は、ギルドの手工業者に較べれば資本への隷属を高めたけれども、工場労働者に較べれば遙かに多くの独立性を保持していた。このような彼らの経済的独立性の基礎となったものは、彼らの農民的性格そのもの、すなわち零細な土地所有であった。それこそこの階層の独自性の根源となり、彼らの土地に対するやみ難い執着を説明するものである。従って農村手工業が工場生産によっておしやられるためには、その前にかかる農村手工業の基盤となっていた零細な土地所有そのものがまず克服されねばならなかった。「家内工業と、その資本への不完全な従属は、中産的ヨーマン農民の階級が頑強に独立性を維持している限り、存在の基盤を失わなかった。こうして土地の零細所有と産業における生産手段の零細所有とは相互に結びついていた。家内工業のこの基盤は、土地財産の集中が進んで、この階級の弔鐘がなり響いたときに、はじめて最終的に掘りくずされたのである」[1]とドッブは叙述している。従ってエンクロージャーが農村手工業から土地を奪った時初めて手工業者は深刻に機械と競争する。かくしてエンクロージャーのもつ意義は、単に農民を土地から駆逐して自由な労働力を豊富に作り出した、ということだけでなく、農村に残存する手工業の基盤たる土地をとり去り、それによって彼らの土地への執着を暴力的に断ち切り、機械との競争をより絶望的なものにした、ということでもある。一八四〇年頃にも、機械の制覇に対して、農村家内工業が広汎に残存し、望みのない闘争を続けていたということは、チャーチズムにおいてコベットやオウコンナー(F. O'connor)に従った人々がどのような階層であったかを知る上に重要である。ではこのような広汎な農村家内工業の残存を可能にし、殊に織布部門で機械と手織との戦いを長引かせたものは何であったか。彼らは既に土地を失っていたではないか。

それを可能にしたのはスピーナムランド制度に基く救貧法と、アイルランドからの移民とであった。労賃が異常に安価な所では投資が行われ、安価な労賃を補う為に救貧手当が与えられるという悪循環が実現する。救貧法に支えられたチープ・レーバーが機械と競争していたのである。「手織りと機械織りとの競争は、一八三三年の救貧法実施以前のイギリスでは、最低限度以下に甚だしく下落した賃銀が教区救済費によって補われたために長引かされた。[2]」従って、マルサス人口論の直接的帰結として、凡ゆる救貧院の外での補助を拒絶する新救貧法は、このような農村手工業の唯一の生存の支柱を奪ってしまったのである。「工場の完全な勝利が確実になったのは、一八三四年に施行された冷酷な新救貧法が、半ば餓死状態にあった織布工たちを圧迫しはじめてからのことである。[3]」ここに新救貧法が農村手工業に与えた打撃の深刻さが理解できると思う。救貧手当をうけるものは凡て当時〝パスティーユ〟と呼ばれた救貧院へ入り、囚人の様な服を着、人口増加を防ぐために夫婦別れ〳〵に収容することを規定しているこの新救貧法は、正にエンゲルスのいう通り、農村手工業者、殊に手織工の生存自体を〝犯罪〟[4]とみなすものであり、窮民(pauper)という身分を立法的に作り出すものであった。[5]かくして、かつては respectable[6] であった人々が憤然として政治運動に立ち上り、広汎な新救貧法反対運動にのり出し、ウィッグの階級立法に対してチャーチズムとして知られる議会民主主義運動に合体していったのである。新救貧法反対運動の主体が手織工を中心とする北部の農村手工業者であったという見解は、殊に社会経済史家の間に多くの論拠を見出すことができる。[7]アイルランド移民の問題もここでは詳述する事ができないが、この様な手織工と新救貧法の問題との関連の中で考察されねばならないことだけをつけ加えておこう。

この時代に手織工は約八〇万人いたといわれ、この点マルクスもハモンドも一致している。[8]工場労働者が、ウェッブのいう様に一〇万にすぎなかったとすれば、彼らがチャーチズムの中で如何に重要な地位をもっていたか推察されよう。オウコンナーが呼びかけた〝あごひげをあたらず、まめだらけの手をして、コール天のジャケツを着た人々〟[9]が決して工場労働者ばかりでなく、むしろこのような農村手織工を中心とするものであった、という見解は、一八五〇年を

境に、イギリス労働運動の主導権を握る労働者階層に変化を認める私の見解の核心ともなるので比較的詳しく論じてきた。北部の実力派の主導権が、既に確固とした組合組織を築きつつあった工場労働者の手にしっかり握られていたとすれば、チャーチズムがオウコンナーの小農化計画に終る事はなかったと思われる。それが土地へのやみがたい執着を捨て切れない農村手工業者であったればこそ、チャーチズムのこの様な経過がうなずかれるのである。

一八三四年に新救貧法反対運動が発足する以前にも、労働者農民大衆を政治的に動員しようとする試みがあった。その代表者はウィリアム・コベット（W. Cobbett）であったが、彼の政治的急進主義はベンタム派急進主義とは極めてその内容を異にしていた。

ナポレオン戦争が終ると同時に一八一五年の過渡的恐慌が起る。この恐慌は深刻な一般的困難をもたらし、対仏戦争の間、一時後退していた急進主義運動を急速に復活させる。この様な一般的不況の中で、凡ゆる革新的階級は〝反トーリー〟〝反腐敗政治〟の線で一致することができた。この一般的困難とは、実は中産階級にとっては〝企業活動の困難〟であり、労働者にとっては窮乏化による〝生存の困難〟なのであったが、それらはまだ資本と労働の対立として、政治的に正しく理解されていなかったのである。この様な反トーリー戦線の共同目標はさし当って、国債、通貨、税金などの一連の必然的関連を結ぶ財政政策に向けられた。[10]「公債及びこれに照応する国家財政制度が富の資本化と大衆の収奪とに大きな関与をなすということ――このことはコベット、ダブルデーその他のごとき多数の著述家をして、不当にも、近代的人民の窮乏の根本原因をここに求めしめるに至った。[11]」つまり、労働と資本、及び土地所有の間の対立が、この様な財政々策の一般性の中に解消されていたのである。だが、反トーリー、反腐敗政治という点では一致していた二つの急進主義の性格の相違はすぐ現われてくる。コベットは、労働者の貧困を正当化するマルサス人口論を攻撃する。[12]「中産階級急進主義は彼を有難がらなかった。というのは、コベットは彼らの指導を拒否し、彼らの経済学を憎んだからである。[13]」ではブルジョア経済学に代って、彼の急進主義を支えるものは何であったか。それは〝古きよきイングランド〟への復帰であった。土地を追われ没落した人々の、やみがたい土地への執着と郷愁を最もよく代弁した〝懐古的ロマンチシズム〟こそ彼の思想の基調であった。ヒルのいう〝ノルマンの抑圧〟（Norman yoke）[14]もこの様なロマンチシズムの一つの側面であろう。それはいわば、後むきの解放思想であり、ベンタムやオウエンの様な思想的体系をもつものではないが、それだけに、土地を奪われた人々の感情に訴える所が極めて強かったと思われる。このような感情に訴えることにより、彼は、戦後の窮迫に対する大衆の不満を、議会改革運動という政治活動にまで高めることに成功した。一八三二年に議会改革が成立し、三四年に新救貧法が通過すると、中産階級急進主義が人類のためでなく、専らブルジョアジーの為のものであることは全く明らかになる。コベットは今や鉾先をウィッグに向け、彼の生涯の最後の運動として新救貧法反対運動をひきおこした。彼が「救貧法は慈善ではなくて法的な権利であり生存の権利だ。[15]」と叫ぶ時、どんなに強く土地を失った人々の心に訴えたか想像できよう。救貧手当は、殊に手織工にとって土地を奪われたことに対する当然の代償として、権利として考えられていたのである。コベットは一八三五年に死んだ。彼によって動かされたのは、これら八〇万手織工を主体とする農村手工業者であり、新救貧法反対運動は、コベットの農民的ロマンチシズムを主要な感情内容としつつ、チャーチズムの中に合体してゆく。

かくして、チャーチズムが北部大衆の新救貧法反対運動をのみこんだ、というその意味は、チャーチズムの中に『ベンタム主義の職人的延長としての議会民主主義』と『コベットに代表される、土地への郷愁を担ったロマンチシズム』とが合流している、ということである。コベットの死後、手織工を中心とする新救貧法反対運動は、オウコンナーの指導の下に入ったが、[16]すでにのべた様に一八四二年の昂揚の後、彼らはその土地への郷愁のままにオウコンナーの小農化計画に従ったのである。

注（1） M. Dobb; ibid., p. 151. 邦訳、上巻、二一二頁。

（2） K. Marx; Das Kapital, Volksausgabe besorgt von M.-E.-L.-Institute, Bd. 1, S. 454. 長谷部訳（青木版）六九七頁。

（3） Ashton; ibid., p. 117. 訳、一二六～七頁。

（4） F. Engels; Die Lage der Arbeitenden Klasse in England, S. 271. 大月版 四二七頁。

（5） 「一八三四年の救貧法改正は……これによって賃銀労働者と窮民内至貧民との分離が行われたことを意味するものである。」大河内一男「社会思想史」二七〇～一頁。

（6） M. Hovell; The Chartist Movement, 1950, p. 80.

（7） J. L. and B. Hammond; The Age of the Chartists, 1832～1854, 1930, p. 269.
A. F. Young and E. T. Ashton; ibid., p. 47.
W. H. B. Court; A Concise Economic History of Britain, 1954, p. 63. 矢口他訳、七六頁。
M. Hovell; ibid., p. 80.

（8） J. L. and B. Hammond; ibid., p. 269.
K. Marx; ibid., S. 473. 訳、七二四頁。

（9） M. Beer; A History of British Socialism, vol. II, 1953, p. 11. 園訳、一四頁。

（10） C. R. Fay; Life and Labour in the Nineteenth Century, 1920, p. 77.

（11） K. Marx; ibid., Bd. 1, S. 797. 訳一一五一頁。

（12） M. Morris, (edited by); From Cobbett to the Chart-

ists, 1951, p. 36.

(13) B. K. Webb; The British Working Class Reader, 1790～1848, 1955, p. 50.

(14) C. Hill; The Norman Yoke, Essays in honour of Dona Torr, Democracy and the Labour Movement, 1954, p. 61.

(15) C. R. Fay; ibid., p. 85.

(16) ハーニーはオウコンナーを〝劣悪なるコベット〟と呼んでいる。A. R. Schoyen; The Chartist Challenge; A Portrait of George Julian Harney, 1958, p. 16.

四、オブライエン――チャーチズムの思想

今迄述べた所により、チャーチズムの思想を構成する二大潮流が明らかになったと思う。即ちロンドン・アーチザンが発展させたベンタム急進主義の最左翼的末流と、農村手工業者の土地ロマンチシズムの二つである。だが土地への愛着の故に、しばしばトーリーとさえ手を結ぶ傾きのある手織工や、その急進主義を中産階級からうけついだためにしばしば中産階級急進主義と自らを区別するのに困難を感ずるロンドン・アーチザンとは異なり、〝チャーチズム教師〟とよばれたオブライエン(B. O' brien)は、チャーチズムのために独自の理論を確立しようと試みた。

第一に彼は、政治革命 (Political Revolution) と社会革命 (Social Revolution)[1] を区別することによって議会民主主義からブルジョア的性格をぬき去った。第二に彼は、コベットが代表する農民的ロマン的急進主義に対してその理論的無内容性を攻撃し、バブーフ (Babeuf) の理論を仲介としてスペンス以来の土地国有論という社会理論的内容を与えた。以下この二つの点を中心に、オブライエンの思想と、彼に象徴されるチャーチズムの性格と限界をみてみたい。

既にのべた様に、ロンドン・アーチザンの急進主義も、コベットの急進主義も共に、しばしば議会改革という政治的操作の中にその階級性を見失う可能性をもっていた。だがオブライエンは、政治的変革と社会的革命の相違を可成り明確に認識していたために、この様な傾きを避けることができた。もちろん彼にあっては、この社会革命なるものも、マルクスのいう様な生産諸関係の直接的変革ではなく、単に「異なった社会階級の相対的な義務と地位の急進的改革」[2]にすぎないが、それでもベンタム急進主義に較べてはっきり労働大衆の固有の利益をうち出している。ラディカルズの議会改革は、単に既に現実のものである彼らの経済的実力を、政権の上にも反映させようとするにすぎないものであって、社会体制を変革しようという意図はもちろんもっていない。これに対して、オブライエンの意図は、議会を民衆のものとすることによって、民衆のための社会的・経済的条件を立法的に作り出そうとするものであった。このように社会革命と政治革命の一応の識別に達していたからこそ一八三二年、プレースが議会改革を支持した時に彼は次の様にいうことができた。議会改革は「民衆の解放ではなくてその奴隷化の為の画策」[3]であり、それがもたらすものは「支配権を貴族から中産階級へ移行せしめ」るだけであり、金貸し (Money monger) の政府を作る丈である、と。このようにオブライエンは労働者大衆のための社会革命を主張した。その内容は後にのべる様な土地国有論であった。だが暫く立ち止ってみよう。彼はこのような土地国有という彼の〝社会革命〟をどの様な手段で実現しようとしたか。それは或いはスペンス主義者のような、又はバブーフのような、無産大衆の暴力的蜂起によってではなく、議会に参与し、政権を労働者が合法的に獲得し、利用する事によって行おうとするのである。「彼は金鬼 (Money monster) をそれ自身の武器――即ち政治権力で倒そうとしたのである。この点に関しては彼はラヴェットやロンドン労働者協会の友人達と全く一致していたのであり、倦む事なく普通選挙権を社会悪の唯一の救済策として宣伝した。」[4] 彼は政治的変革と社会革命を明瞭に区別し、労働者を真に解放する為には政治革命ではなくて社会革命が必要である、と主張しながら、しかもその社会革命の実現手段としては、議会民主主義以外考えつくことはできなかったのである。我々はここに憐むべき循環論をみない訳にはいがない。だが、ここに実はチャーチズム自体の限界もあるのであって、それは議会民主主義を専ら労働者のものとして意識したが、しかもなお、議会民主主義自体からは理論的には一歩も出ることはできなかったのである。

他方、オブライエンは又、コベットの理論的内容のない、後向きの急進主義をも攻撃する。彼にとってはコベットばかりでなく、カートライト (Cartwright) やペイン (T. Paine) の主張も〝あひるの喚き〟(Quack)[5] にすぎない。かくして彼は議会民主主義によって実現すべき社会革命の内容として土地国有論を提出するのである。

「都市の全奴隷制も、農村の全奴隷制も、土地独占の創造物である。」[6] 従って、土地独占を打破って土地を国有にすること、これが彼の社会革命の根本命題である。この土地国有の思想は、本来スペンス (T. Spence) などの土地社会主義から受け取ったものであるが、彼はブォナロッティ (Buonarroti) を通じてのバブーフの理論[7]を援用することによって、土地社会主義を、工業的に高度に発展しているイギリスの現実にあてはめようとしたのである。

周知の通り、スペンスらの土地社会主義は、エンクロージャーによる農民の窮乏に刺戟されて起ったものであり[8]、専らヨーマン層の分解に対する抗議であった訳だが、チャーチズムの段階では、オブライエンは単に土地を逐われた農民だけを救済すればいいのではなく、それ以上に、工業的生産組織の中で苦しむ労働者をも救うものでなければならなかった。つまり農村の奴隷ばかりでなく都市の奴隷をも救済せねばならない。そこで彼は、土地所有こそ私有財産の源であり、従って凡ゆる社会的害悪の原因である、と説くバブーフの理論を[9]、より資本主義的なイギリスにそのまま援用しようとする。バ

ブーフの時代のフランスにあっては、まだ私有財産は専ら土地所有を意味したと考えられるが、工業的イギリスにそれが渡った時、それは土地のみならず、工業生産における私有をも意味しなければならなくなる。ここに「都市の全奴隷制も、農村の全奴隷制も、土地独占の創造物である」という彼の根本命題が生れる。

だがオブライエンは、バブーフに倣って凡ゆる害悪の原因たる私有財産を廃止させようとはせず、この点ではイギリス土地社会主義に従って土地独占さえ廃止されるならば、「他のすべての財産は個人に属したとしても、それは人民の幸福とも、社会的正義とも全く対立するものではない」[10]のであり、土地国有によって、社会的災厄はすべて消滅する、と考えた。スペンスらの土地社会主義者は、土地が人間の生産物ではなく、神の賜物であるという理由で土地の私有には反対したが、その他の生産物についてはロックに従い、労働にその所有の権原を認めて私有を許したのである。[11]

このことはバブーフの理論からその革命性をぬき去ることを意味した。彼は、土地が国有化され、法の前に万人が平等になるならば、私有財産全体には敢えて反対するものではない、と宣言する。「ブォナロッティはすべてこれらの結果は私有財産と不可分であると考える。バブーフも又そう考えた。そして一七九三年の数千のフランス民主主義者も又そう思った。ロバート・オウエンや今日の彼の弟子達もそう考えている。私の考えは違っている。私はそれがすっかり試みられるのをみるまでは、私有財産は一般的幸福と両立しないとは決して認めないであろう。」[12]

このようにみてくると、彼にあっては土地財産が、私有財産一般から切り離されて考えられ、土地財産さえ国有化されるならばその余の私有財産はそのままでも、凡ゆる社会的災厄はすべて霧の如く消えさるであろうと考えられていたのである。実際、ここに彼の限界、ひいてはチャーチズムの限界がある。彼はイギリスを覆いつつある産業資本の進展を正しく評価することができず、そのために、都市の奴隷制の苦悩、すなわち、工場労働者の窮乏の真の原因を見出すことができなかったのである。

一言にして彼を評価すれば、彼はバブーフの理論を媒介として急進主義と土地社会主義とを結合させたのである。だが彼が社会的変革の手段としては議会民主主義から一歩も出られなかったこと、及び土地さえ国有にされるなら、工業組織におけるすべての社会的災厄は自然消滅すると考えたこと、この二つの点に、今迄考察してきたチャーチズムの二つの労働者層、ロンドン・アーチザンと農村手工業者の性格と限界が滲み出ている、と私は考える。

注（1）M. Morris, (edited by); ibid., pp. 161～2.
（2）Ibid., p. 161.
（3）Th. Rothstein; Beiträge zur Geschichte der Arbeiterbewegung in England, 1929, S. 118.
（4）H. Pelling, (edited by); The Challenge of Socialism, 1954, p. 120.
（5）Ibid., pp. 68～69.
（6）Th. Rothstein; ibid., S. 57.
（7）オブライエンはブォナロッティの「バブーフの所謂平等の為の陰謀」(Ph. Buonarroti; Conspiration pour l'égalité dite de Babeuf, 1828) を註釈をつけて英訳している。
（8）飯田　鼎「ナポレオン戦争後に於ける労働運動と急進主義運動」三田学会雑誌、五〇巻、五号所収、一七頁。
（9）平井　新「近代社会思想史」一七八～九頁。
（10）F. F. Rosenblatt; The Chartist Movement, in its Social and Economic Aspects, 1916, p. 117.
（11）M. Beer; ibid., vol. 1, pp. 106～8. 訳一二八～一三〇頁。河合栄次郎「英国社会主義史研究」第一部五二～九頁、地主はその労働によって土地の用益を高めたとしても、土地そのものを作り出したのではないから土地を私有することはできぬ、とスペンスらは主張する。
（12）F. F. Rosenblatt; ibid., p. 118.

五、工場労働者

以上で私は、チャーチズムを構成する二つの労働者階層の歴史的な性格を明らかにすることによって、その闘争の方向と内容を規定しようと試みた。ここではその第三の構成要素である工場労働者の

チャーチズムにおける労働者の性格とその思想

性格を考察するであろう。彼らの闘争の方向は、ロンドン・アーチザンが、中産階級の急進主義を労働大衆へと媒介するために専ら教育と宣伝という啓蒙活動に専念したのとも異なり、又農村手工業者が、その失われた天国を回復するためにオウコンナーの小農化計画についていったのとも異なっている。これら二つの階層は議会民主主義という手段では工場労働者と一致していたけれども、それによって実現さるべき社会変革の内容と方向は、既にみたように、資本主義発展の現実とそのメカニズムの確認の中から、理想社会を実現しようとするものではなく、いわば歴史の回転を逆にするような方向で闘ったのである。彼らの闘争は、資本の発展によって押しやられつつある労働者部分として、資本主義の発展自体に逆行するような方向をもっていた。

では工場労働者はどうであろうか。マルクスは「マニュファクチュア間での労賃をめぐる闘争は、マニュファクチュアを前提とするのであって、けっしてその実存を覆そうとするのではない。マニュファクチュアの形成に対する抗争が行われる限りでは、それは同職組合親方や特権都市によって行われるのであって、賃労働者によって行われるのではない[1]」とのべているが、この言葉は又機械制大工場についてもあてはまる。工場労働者は工場そのものの実在を前提する。機械工は機械そのものなくしては存在しえない。従って彼らが抵抗したのは、工場制度の内部における労働条件の悪化に対してであって、工場制度それ自体ではない。工場制度と闘うのは、それに

よって絶滅の淵に追いやられた旧い生産制度に他ならない。農村手織工が立ち上ったのは、資本の要請に基いた新救貧法[2]が、彼らの存立それ自体を否定したからである。

従って、工場労働者の闘争の方向は、彼らに与えられた機械と工場を事実としてうけとり、その中での、より堪えうる労働条件をかちとることだったのである。かくして彼らの要求の具体的内容は、工場法制定であり、十時間法の獲得であった。「工場労働者たちは、殊に一八三八年以来、すでにチャーターを彼らの政治的な選挙スローガンたらしめたのと同様に、十時間法案を彼らの経済的な選挙スローガンたらしめていた[3]。」「この当時にもすでに新救貧法反対、十時間労働法案支持の運動は、チャーチズムともっとも緊密に結合していた[4]。」

だが、不熟練、未組織労働者を含めた、工場労働者全体の運動の方向はこの様なものであったとしても、彼らの頂点に立つ大工業組織労働者の間には些かこれと異なった動きがみられる。というのは、彼らの益々強固になってゆく組織と団結の自覚は、彼らの具体的要求を実現すべき手段をこの様な組織自体、即ち労働組合に求めしめる傾向があったのである。彼らは、抽象的な政治的スローガンによってではなく、強固な団結とストライキ闘争によって経済的要求をかちとることができたのである。ここに、チャーチズムと労働組合との間の溝が生じうることとなる。オブライエン[6]やジョーンズ(E. Jones)[6]、殊にマクドウァール(P. McDouall)[7]は、くりかえして労働組合に対してチャーチズムと一体になるように訴え、彼らの政治闘争への冷淡さを責めている。ウェッブは次の様にさえいっている。「組合員の若干は憲章のもっとも熱烈な支持者を供給したとはいえ、いかなる時にも労働組合が、チャーチスト運動の一部分となったと信ずべき理由なきことをいえば足るのである[8]」「同時代の労働組合の今なお現存せる記録には、チャーチストの決議は痕跡だも認められない[9]。」

要するに彼らは、議会民主主義の中に凡ゆる未来への希望を漠然と托していたチャーチストとは違って、彼ら自身の組織と経済的実力を養うことに関心をもったのである。その努力の対象は、労働組合と、消費者協同組合と、彼らの生活に直接関係のある法律の獲得であった。一八五〇年以降、イギリス労働運動を特徴づけるいわゆる〃ニュー・モデル〃の組合は、既に一八四〇年代にその存在を確立していたのである。チャーチズムと労働組合との関係は未解決の問題の一つである。不熟練・未組織を含む全体としての工場労働者は十時間法を媒介にチャーチズムに参加した事は疑いないが、その精髄たる労働組合は必ずしもそれと一体にはならなかった。

一八四二年は深刻な不況の中に労働組合が最もチャーチズムに接近した年であった。その年の八月は「運動がその絶頂に達した月であり、」「ゼネ・ストの月であり、労働組合が政治的チャーチズムに従属した月であった[10]」。だがチャーチスト指導者は、この様な近代的組織労働者のストライキ闘争を指導する資格に全く欠けていた[11]。

それはオブライエンの思想においてみた通りである。だが又、工場組織労働者も、この段階ではまだ政治的チャーチズムの指導権を握ることはできなかった[12]。

労働者が近代プロレタリアートとしての階級的同質性に到達し、資本主義的生産の成熟の中から、機械生産組織を自分の力によって解放しようという前進的運動――近代社会主義――が生れる為には猶、暫くの時間が必要であった。

注(1) K. Marx; Das Kapital, Bd. I, S. 451. 訳、六九四頁。

(2) 「この法律は、労働市場における無制限な自由取引を保証するものであった。」
M. Dobb; ibid., p. 275. 訳、下巻八〇頁。

(3) K. Marx; ibid., S. 294. 訳、四八二頁。

(4) F. Engels; ibid., S. 218. 訳、三四四頁。

(5) M. Morris, (edited by); ibid., pp. 131～3.

(6) J. Saville; Ernest Jones, Chartist, 1952, pp. 106～7.

(7) A. L. Morton and G. Tate; ibid., p. 89.

(8) S. and B. Webb; The History of Trade Unionism, 1920, p. 175. 〃荒畑訳、上巻一七四頁。

(9) Ibid., p. 176. 訳、一七五頁。

(10) M. Beer; ibid., vol. II, p. 139. 訳、一四六頁。

(11) 労働組合のストライキ闘争をチャーチズムと結びつけようとする動きは、チャーチスト指導者によってではなく、むしろ労働組合によって行われた。「ストライキは憲章が法律となるまで続けられねばならぬ、と宣言することによって、ストライキに全く新しい目的をみちびき入れたのは八月十二日、マンチェスターでの労働組合代表者集会の会議においてであった。この決定に対して全国憲章協会は殆どその指導の責任を負えなかった。」
A. R. Schoyen; ibid., pp. 114-5.

(12) A. L. Morton and G. Tate; ibid., p. 83.

六、結　び

チャーチスト運動は決して一つの同質的な要素から成る議会民主主義運動ではなかった。それは、夫々独自な性格をもつ社会的諸階層が、資本主義発展の過程の中で、一定の契機に刺戟されて結合し、爆発した大衆的政治運動であった。だが疑いもなく、その内容は中産階級の自由民権運動の様なものとは異なる。何故なら、一八三二年の議会改革で既に政治的権利を獲得した中産階級は、もはや自らの政治的権利のために戦うべき理由をもたないのであって、彼らがチャーチズムに関連した場合、それは、〃通貨改革〃や〃穀物法撤廃〃や〃好況〃などのブルジョア的利益を実現するためには労働大衆のエネルギーが必要だったからに他ならない。だが、チャーチ

ズムにおいては議会民主主義は、労働階級が窮乏から脱出するための唯一万能の手段として要請されている。従ってチャーチズムは全く労働階級のものである。しかし、この労働階級なるものの実態はこれまでみてきたように極めて複雑であった。チャーチズムにおける内部抗争や、その衰滅の理由もこのような構成要素との関連なしには理解することはできない。十九世紀殊にその前半は資本主義発展の中で旧い生産形態が淘汰されてゆく過程であり、労働者が近代プロレタリアートとしての階級的同質性を高めてゆく過程である。この様な過程の中で、ロンドン・アーチザンはその歴史的役割を終り、農村手工業者は機械と新救貧法によってもはやその社会的意義を失って行った。そして一八四六年に穀物法の撤廃が中産階級を、一八四七年の十時間法制定が工場労働者を満足させると、もはやわれわれはチャーチズムの昂揚をもたらした殆どすべての社会的条件が過ぎ去っているのをみる。「新救貧法は法文の内容よりも実際はずっと穏かに実施されたし、十時間法闘争は一八四七年ロバート・ピールがその工場法を通過させると共に労働者のものとなって終った。したがってチャーチスト運動は正にこれらの希望と目的を目ざしていた全ての支持者を失ったのである。」[1] かくして一八四八年以降、イギリス労働運動は組織労働者の〝ニュー・モデル〟の時代に入るのである。

一八五〇年以前におけるイギリス労働運動の革命的、政治的傾向は、それ以後今日まで続くところの〝穏健〟な労働運動と較べて著しく異質的である。周知の通りエンゲルスは労働運動のこの様な政治的穏健化の理由を、イギリス資本主義の〝世界の工場〟としての発展に帰している。[2] 海外植民地からの超過利潤が労働者上層部をうるおし、その闘争性を失わせた、というのである。私の研究の積極的意図は、労働運動を構成する労働者諸階層の性格を分析し、その内部構成の変化を重視する点でエンゲルスのこの説明を補足しようとする所にあった。

注(1) K. Diehl; Sozialismus Kommunismus und Anarchismus, fünfte Auflage, 1923, S. 268.

(2) エンゲルス「イギリスにおける労働者階級の状態」一八九二年ドイツ語第二版への序論、大月版五〇四頁。

資料

ギルマン

『利潤率の低落』をめぐって

井村喜代子

一

周知のごとく、マルクスは『資本論』第三部第三篇第一三章において、資本の有機的構成の高度化によって平均利潤率が低落することを、「資本制的生産にとって甚だ重要な」「法則」[注1]として論定した。この「法則」は資本が利潤を追求する過程自体のなかから、利潤率の低落が必然的にうみだされるという矛盾を示しており、「資本制生産様式の制限性と、その単に歴史的・一時的な性格とを立証する」[注2]ものであるといわれている。それゆえ、この「法則」は『資本論』体系においてきわめて重要な位置をしめているといえよう。

しかしながら、この「法則」の論証自体についても、また産業循環という形態をとって進む資本蓄積の運動のなかで、この「法則」がいかにつらぬかれ、いかにして資本制生産を制限づけていくのかという点についても、『資本論』の説明は決して充分なものとはいえない。

ギルマン『利潤率の低落』をめぐって

戦後、スウィージーやJ・ロビンソン等がこの「法則」の論証の不充分さを指摘したため[注3]、これをめぐって一九五二―五年頃、多少の論議が行われたが、この論議も決して右の問題を解明するものではなかった。

スウィージー等が提起した疑問はつぎの点にあった。マルクスは「法則」の証明において剰余価値率一定という前提をおき、有機的構成の高度化から直接に利潤率の低落を導きだしている。しかし、生産力の発展は同時に他面では、剰余価値率の上昇、不変資本の価値減少等をもたらすから、利潤率の傾向は不確定である。

これに対して、わが国の論者達は

(1)「労働の搾取度増大による労働者数減少の補償には、超えることのできない特定の限界がある」[注4]。

(2)生産力の発展は第一部門の方が第二部門よりもより高度に進む傾向にあるから、総資本の有機的構成が高度化する平均率よりも、労働力の価値の減少・相対的剰余価値の増大の率は小さい。